
死神見習い中

神威ガン s

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神見習い中

【Zコード】

Z0798F

【作者名】

神威ガンス

【あらすじ】

俺は”普通”的な人間だ。いたって”普通”。どこにでもいる”普通”的の高校生だ。なのに何故……？どうしてこうなるんだ……。俺は”普通”的なはずだ。こんなことは俺は絶対に認めない。

プロローグ　『認めない』

俺は體矢城空。
そら

空と書いて『てん』と読む。

どりいどもある、普通の公立高校に通う高校一年生だ。

高校一年生になれば、現実はアニメやマンガとは違つとわかる。

幼馴染が可愛い女の子なんてやつは見たことがないし、ましてやその子がバレンタインデーにわざとらしく『義理！－！－』と、大きくかいだチヨコを渡すなんてありえない。

朝、学校に遅刻しそうになつた時にパンを衝えた女の子とぶつかつたことなんてないし、空から女の子が降つてきたりするなんてものを見たら、迷わず病院へ行くべきだらう。

そんなものはC級アニメの典型だ。

だから俺もあの時に病院へ行くべきだったんだ。

だぶん学校帰りにヤンキーに絡まれて殴られたとき、頭がおかしくなつたんだ。

そうじやなかつたらおかしそぎる。

今、俺の田の前には『死神』と名乗る美少女がいる。

ハツキリいおひへ、「あつえない！」。

これはなにかの陰謀だ。

そうでないなら悪い夢だ。
夢なら早く覚めてくれ。

俺は、断固認めない！！！

プロローグ　『認めない』（後書き）

さて、新しい作品です。
どうでしょうか？

とはいって、まだプロローグですかうね。
1話を続けて投稿します。

必ず見てみてくださいネ

そしてできれば感想ください（――）

ではでは、これからよろしくお願ひします。

第一話『出会い』

今日も一日乗っけた。

俺は学校が終わればすぐ帰る。

掃除をするやつ、部活にいくやつ、友達を待つているやつなどいろいろいるが俺はどれにも当てはまらない。

掃除は担当じゃないし、部活にも入っていない。
友達と呼べる人間は……いなくはないが、待つほどではない。

ちゅうど今、校門を出たあたりだ。
そろそろ来るはずだが……。

「おーい、なんで待ってくれないんだよ〜」

うん、やつぱりこいつだつたか。

ここには西島栖那とうじますな。

俺の中学時代からの友達だ。

「うむ、我ながら見事なほど計算通りだ」

「は?何言ってんの?」

「いや、こいつの話しだ」

「ふ〜ん」

いつもと同じ、たわいもない会話。
まあ、これでも結構満足してる。

そういうえば今日はレンタルCICOの返却日だったつけ？
そうだ、返しに行かなければ。

「わるいけど」

と言つて、反対方向に行くとジャスチャーをしてみせる。
レンタルショップは不便なことに、家とは逆方向だ。

「ん？あー、わあつた。了解、了解
「すまんな」

長い付き合いだからこれで済む。

あいつは『わるいけど』の一言で察してくれたようだ。

俺はその後、レンタルショップに行き、CICOを返し、また新しいCICOを借りる。

そして電車に乗り、家に帰つて飯を食つて寝る。

…………はずだつた。

レンタルショップから駅までは結構な距離がある。
だが、近道をすればそれでもない。

わざわざ大通りを通りていっては電車を2本は逃す。

そこで俺は出会つた。

…………ヤンキーだ。

いや、チンピラと言つただろうか？

そんなことなどどうでもいい。

「」の状況をどうするかが先決だ。

よし、絡まれた時の状況を思い出せばなんとかなるかもしねないな。

- 今から5分ほど前 -

俺がいつも通り抜け道を通りつとしていたら、その道を塞いでいる集団がいた。

時間がかかるともいい。面倒はいやだ。
当然の」とく俺は方向転換して戻る。

「おーいりあ、なにみとんじやあ

見つかった。

ヤンキー（もといチングピラ）のリーダー格の男に声をかけられた。
人間の心理だ。一人が絡めば残りの奴らも全員来る。

「んだてめん」「あああああッ！……いてえみてえのが」「ああああ
ツ！……！」

「をるうあてめええ、うツてん場合」「ええんあぞおおおお……」
「んじや」「あああああッ！……んとか言つてみいいい……」

ここからは最高に日本語を支障しているみたいだ。

まともな日本語は最初のやつだけの専売特許みたいだな。
と、思いつつも、正直意味がわからないから苦笑いをしてしまつた。

「んだいりあああッ！……なにわらうとんじやあああ
「をりあ」「ねうああああ！……ぶつ」「おそれてえのか」「りあああッ
！……」

ほんとに何て言つてんだか……。

まあ、要約するといつだらう。

我々、ヤンキー一回はあなたが見ていたことの大変気分を害します。
そして、見物料として財布を丸ごと置いて行ってください。
そうしていただければ、あなたの体に害は加えません。

我ながら完璧だな。

まあ、金は持っていないがこんな奴らに渡したくはないな……。

「悪いが、俺は今、金を持っていない。だからいりますまいが……」

「……

そつぱつて少しずつ後ろに下がっていく。
これで完璧。

……と、思ったのだが。

『ガシツ！』

「おいや、あ、さり気なく逃げようとしてござやねえだらう

リーダー格の男に肩を掴まれた。

ああ、日本語つて素晴らしい。

じやなかつた、さびしきしたものか……。

「調子くれとんじゃねえぞおいらああッ！……！」

「んなじあじあああッ！……いてえめみてえんだな！」「あああッ！……！」

「ぶつとばすんだ！」「ああッ！……！」

と、その時俺の腹部に痛みが走った。

ああ、殴られたのか。

まあ、それでもいいか……。

『バキッ』『ドスッ』『ガスッ』『ボカッ』

俺は殴られ続けた。

痛みは伴うが、それで済むならこっちの方がいい。

なんせ一瞬だ。

その時……。

『シャキッ』

ナイフを取り出したやつがいた。

おいおい、それは笑えないぞ。

「しんねえええごりああああツーーー！」

いや、それはマジでままずいつ。
マジで死ぬつて。

「やめぬか」

女性の声だった。

いや、声質的には女の子かもしれない。
そして、その声が聞こえた直後……。

『ドンッ』

そんな音と共に光が拡散し、ヤンキー（もとこチンピラ）は吹き飛ばされた。

いやいやいやいや。さ。

なんだよこね。

三流映画かよ。……。

と、思いつつも俺はその光に見とれてしまった。

「あんた、生きてる？」

これが俺と『あいつ』の出会いだった。

第一話『出会』（後書き）

さて、どうでしたか？

また一話タイトルが出来になってしましました。

なんて言つてないで、どうでしょうか？

まだヒロインもとい死神が出てきませんね。

予想はできてるとは思いますが軽くネタばれですね。

ではでは、この作品をよろしくお願いします。

第一話『死神の仕事』

「あんた、生きてる?」

これが最初の言葉だった。

生きているとも。

俺は死んでない・・・・はずだ。
今ここにがある世じやないならな。
さて、いつたい何が起きたんだ.....。
こいつは誰だ。今のは何だ。さつきのヤンキーはどうなった。何より、俺はどうなった。

「そんないつきに聞かれてもしもあるかな」

と、言ひてワンテンポ置いてから答え始めた。

「あたしは死神。今のはあたしがあんたを助けたの。さつきのヤンキー、つて言つのはあたしがすることをした後に氣絶させただけ、あんたは.....どういう意味?」

死神? ワツツ? なんだってんだ。やっぱり俺は死んだのか? 死神ってなんだよ。

まあどうあえず.....

「俺は生きているのか」

こう言つのが精いっぱいだ。

声が震えないようにするので甘いんだよ。

「ああ、そんなことね。それはあたしが聞いたんだけど……。まあ、いいわ。あなたは生きてるよ。うん、死んだまま話してるんじゃなければ、ね」

生きてる？俺は生きてるんだな。

ん？何か重要なことをスルーしている気がするな……。

そうだ、死神だつて？おいおい、ふざけるのも大概にしろよ。

「ほんとよ。だからあなたが生きてるんじゃない。あたしがいなかつたらあんた……ね？」

ね？と言われても困る。

とにかくこいつは危ないようだな。

助けてもらつたのはありがたいが、あまり関わらない方がよさそうだ。

「タスケテクレテアリガトウ。オレハイソイデルカラ、ジャアナ」

おもいつきり感謝の気持ちを込めて俺はいつ言った。

「あんた、ふざけてんの？」

その通りだとと思う。

俺もこんな奴がいたらそう思うだろ？

だがお前の言動の方がふざけてると思うね、俺は。

「あんた、信じてないでしょ？」

信じじるも信じじないも……なあ。

ハツキリ言おう、信じられるものか。死神だと？笑えん冗談だ。
……なんては言えないな。この女の言動から考えてどう返される
か想像つくからな。

「いや、信じていろ。今もさっせき言じていろわ」

そう言つて駅に出発。

今ならまだ次の電車に間に合はねばずだ。

「ちょっと待ちなさいよ。せっかく助けてあげたのに。なんなのよ、
その態度は」

「礼は言つたはずだ。それとも金でもとるのか？」

「なつ、あんた馬鹿にしないでよね。あたしはお金なんて取らない
わよ

ならなんで絡むんだ。

俺はそこまで暇じゃない。…………帰つて寝る用がある。

「それは用つて言わないでしょ。それよりあんた助けてもらつたん
だからあたしの仕事手伝いなさいよ」

いや、何を言つているのかわからん。

助けてもらつたのと仕事を手伝うのは、いつの間にイコール関係にな
つたんだ。

まさか最近の死神はそつやつて奴隸を増やすのか？

「違うわよ。ただ助けた礼つてことで人手も足りないし手伝つても
らおうかと思つただけ

思つただけ、ね。

本当にそなうなら『手伝え』なんて言わないと思うけどね。

大体『助けた礼つてこと』で『なんて普通は助けてもらつた側のセリフだと思つが。

たとえどうでも俺は言わないけどね。

それより、とりあえず聞くことは聞こつか。

「その『仕事』ってのはどんなことをするんだ」

「ああ、簡単よ。ただ人を『寿命通りに死なせる』だけ、よ

は？」

寿命通りに死なせる？

どういふことだ？ まつたく理解できん。

「ん~、じゃあね、わかりやすくしてあげる。あなたはさつきナイフで殺されそうになつたでしょ？ でもそこで死ぬのはまだ寿命の前なの。つまり寿命前に死にそうな人を助けて、寿命より生きている人を死なせるのが『死神』の仕事よ」

説明したやつたわよ。ありがたく思いなさい。
みたいな顔をされても困る。

まあ、とりあえずはわかつた。寿命通りに人を死なせるのが仕事つてことだな。

じゃあ病気とかで死にそうな人はどうすんだ？

「ああ、簡単よ。その病気を治せばいいんじゃない」

ああ、そうか。治せばいいのか……。
つて、そんな簡単なのか？

じゃあ病気で死なせたりもできるのか。

「まあ、できなくはないけど……。えへっとね、病気はその人の寿命によるかな。その人がもつと生きるなら治すし、もう直ぐ寿命の人なら死期を伸ばすだけ。それと、死神の力量も関係するわね。力の弱い死神だと、まだ長生きする人の病気を治せないで、何十年も病気のまで過ごさなきやいけない不運な人もいるわね」

死神にも力量つてのが有るのか……。

ん？ そういうば言つてたな。『俺に手伝え』、と。
つてことは俺に人を殺せつてことなのか？

『冗談じやない。俺はこの年で警察に捕まりたくはないぜ。

「なんか勘違ひしてない？ 寿命より早く死ぬことはあつても、長く生きるなんて普通はないの。どちらにしても『普通』の人間は何もすることもなく寿命通りに死ぬけどね」

「だつたら死神の仕事なんて必要ないじやないか」

「もしかしてあんたバカ？ うーん、聞いた話と違うなあ。言ったでしょ？ 『普通の人間は何もすることもなく寿命通りに死ぬ』って。それにあんたは今助けられたでしょ？」

『普通の人間は何もすることもなく寿命通りに死ぬ』だと？

じゃあ普通じやない奴は寿命通りに死なないのか？

しかもあいつが言つたことが本当なら俺は『普通の人間』に該当しないのか？

「そうね。あんたは『普通』じゃあないわ。あんた人生の中で何回死神に助けられていると思う？ 『普通じやない人間』の中でも特に『普通じやない』わ。だから自分の身を守る術を知るためにも仕事を手伝いなさいつて言つてるんじゃない。むしろ礼を言われたいくらいよ」

俺が『普通じやない』だつて？ ホワイ？ なんだつてんだ。

俺の何が『普通じゃない』ってんだ。

その時、突然体が重くなつた。
まさか、あのナイフが刺さつていたのか?
いや、そんな訳は…………。

俺の思考はそこで途絶えた。

第一話『死神の仕事』（後書き）

さて、皆様どうでしたか？

この話は主人公と死神の死神に関する話です
空と死神の最初の出会いは唐突でしたね

まあ、この話は空の意識がなくなることで終わるんですが次から
はこれと全然違うタイプ（？）になるので期待していくください
ではでは、これからもよろしくお願いします

第三話『夢落』

「ん……」

鳥のさえずりがやけに五月蠅く感じる。

俺は……寝ていたのか？

！――！

「…………」

忘れていた。

たしか俺はチンピラに絡まれて、死神とか言つやつに助けられた後に……。

少し話した記憶はあるが内容が思い出せない。
いや、それ以降から今この時までの記憶がない。
そしてここは間違いなく我が家にある俺の部屋だ。

「…………夢？まさか、な…………」

あれが夢だったなんて、な。

でも、いつ俺は家に戻ったんだ？

それに夢ならいつからだ？

「何時だ？」

一言ずつ声に出してみる。

今が現実であると、そう少しでも思えるように。

時計の長針は2と3の間を指していた。

じゃあ短針は？

「6時？」

「いいで俺は思った。

やはり俺は混乱（動搖か？）しているようだ。
時間がわかつたからって何になるって言つんだ。
重要なのは今日が何月何日か、だ。

すかさず俺はカレンダーを見た。
俺の部屋にはカレンダーが三つある。その中の扉に一番近いやつを見た。

見た。

「9月3日？ 昨日と同じ日ですか……なのか？」

「うう」といた。

やはり夢だったのか？

つまり昨日ではなく、今日？
つてことは……。

「…………あれは夢、か。よかつたあ

無意識にやう言葉が出た。

唯一残念な点があるとすれば、またじりを返しに行かなければいけないところじとだな。

なんてくだらない事を考えている間に今の時間はもう6時35分。

「起きるか」

俺は起きる」とした。

学校までには、まだ時間があるけど、一度寝向てしたら確実におきれないからね。

「制服にでも着替えるか」

起きるなら着替えるか。

また部屋に戻るのも面倒だしな。あと鞄も、か。
現在時刻は6時47分。

うん、ぴったりだ。

「おはよう」

妹がいるだらつキッキンに向かってしゃべりつ。

「あれえ？ 空、起きるの早いねえ」

この変な喋り方をするのは俺の妹、榎矢城香向だ。
俺と同じ高校に通っている、『ぐく』普通の女子高校生だ。
まあ、俺と違いまじめだけだ。たしか生徒会役員をしていたはず
だ。

「ああ。なんか目が覚めてな」

「怖い夢でも見たの？」

「この年で夢なんて見ないよ。それより飯は？」

ピンポイントじゃねえか。

正直、少し焦った。なんて感が鋭いんだ。

「夢見るのに年なんて関係ないよ。あ、『ご飯はもうできてるナビ
お……食べる？』

「ああ、頼む」

うちには香向が全ての家事をしている。

母は俺が小さい頃に病死。父は仕事。のはまだ

だから香向が家事をすることになつてい

父はもう一年は帰つて来てない（生活費は毎日送られて來ているけ

ど）。

でも、不自由だなんて思つていない。俺と香向だけで十分満足してい

る。

なんて考えてこの間に田の前にトーストと田玉焼きが出てきた。

「お待ちがどりまあ。今日は起きたの遅くて、」めんえ「

「いや、いいや。作つてもうえるだけでありがたいつてもんだ」「空、私ももう出るからねえ。今日は生徒会の仕事があるんだあ

「ふ〜ん。まあ、頑張れよ」

「うん。じゃあ、行つてきまます

そつ言つて玄関に向かい、家を出た。

「俺も飯食つたら行くか」

『普通』の日常。

これが俺の『いつも』日常だ。

あんな夢を見た後だからすゞくありがたく感じるね、ほんと。それにも、変な夢見たな……。

アニメとかだとあの女（死神の）が転入生として出てくるって感じだよな。

まあ、これは現実だけどな。

「さて、学校行くか」

飯を食べ終わり、学校に行く準備（と言つても靴を履くだけ）を始

めた。

うちの学校の瑠璃色の制服がとても立つ。

この時間は人が多いみたいだな。

学校までは歩きだ（時間がない時は自転車だが）。

一人で学校行くのも久々だな。

なんて考えていたら俺は不意に声をかけられた。

「空君、今日は早いですね」

うちのクラス委員の美月瑞希みづきみずきだ。

苗字と名前が同じ（書くときは別）の珍しいやつだ。

「ああ、急に田が覚めてな」

「よかつたです。これからも急に田が覚めて下さいね」

「おいおい、無理言うなよ」

「ちなみにこの時間が『早い』に該当するのは空君だけですよ」

「なつ、俺だつて急いでいるんだ。けど気づいたら時間が……」

これが『普通』の会話。

やっぱありがたいね、うん。

瑞希と話していたらもう学校についていた。

そして教室に入ったとき、俺は『異常』に気づいた。

第三話『夢落』（後書き）

さて、どうでしたか？

夢落ひとじつありきたりのパターンですが、これは布石です
まあ、違かつたらすじくべだらない話しだすが

それでも次話やほかも物語との関連性を高めるために必死です

何度も何度も書き直して……

でも、他の物語との関連はまださきですネ

期待しててくださいネ

それでは、これからもよろしくお願ひします

第四話　『転入生は・・・』

俺は『異常』に気づいた。

「なんで……これしかいないんだ」

明らかに生徒の数が少ない。

教室に居るのは、3人。

今来た俺と瑞希、それにクラスメイトの美倉絵美理だけだ。
なーんてな。

確かに生徒の数は少ないが、別に異常じゃあないだろ。
たまたま遅いか……。まあ、何だらうと美倉に聞けばいいんだし
な。

なんて考へている所へ美倉は話しかけてきた。

「あつ、瑞希と空じやん。空今日は早いね。といひで、二人は職員
室の前通らなかつたの？」

「なんで朝からそんな縁起の悪いとこ通らなきやいけないんだ」

「うん、すごく同意する。てことは通らなかつたんだね」

「で、職員室でなんかやつてるのか？抜き打ちの通つた者順テスト
とか」

軽く笑い口調で言つてみた。

普通に考えて何もなかつたらこんな話題は振られない。

まあ、たいしたことじやないだらうけども。

「ああ、やつぱこの人数は気になつた？原因は転入生だつてさ。そ
れも超美少女。だからこれしか居ないみたい」

「お前は行かないのか？みんなが行くほどの美少女なんだろ？」

「ああ、あたしそういうのバス。興味ないから」

「まあ、だろうな」

「それに、うちのクラスらしいよ。だつたら見に行かなくても見られるじゃん」

「うちのクラス？ 人数的に3組じゃないのか？」

うちの学校は人数が一番少ないクラスに転入生を入れるようになっている。

もともと少ない3組は、生徒が2人も転校したから一番少なく、転入生は3組のはずだった。

「わかんないけど私が聞いた話だとうちのクラスらしいよ

「ふうん。まあ、どうでもいいけど」

転入生か……。
まさか、ね。

マンガじゃないんだからさ。

だいたいそんな美少女って程じゃなかつたはずだ。

それにはあれは夢だったんだ。日にちだって戻ってるんだし、間違いない。

なんて考えながら話していたら、予鈴が鳴り、転入生を見に行つたらしい生徒が一気に戻ってきた。

その中の一人、栖那が俺に話しかけてきた。

「んお、空？ 予鈴前からいるなんてなんかあったのか？」

まったく、どいつもこいつも……。

俺が早く来ると皆そう思うのか？

言つとくが俺は遅刻をしたことはないぞ。

「わかつてゐるよ。でもお前にいつもギリギリじゃん」

そつと呟かれると言ひ返せない自分が悲しい。

「てか転入生の話聞いたか？すつしつしつげえ美少女だつたぞ」

なんだそのタメは。

そんなに『つ』をつけなくとも美倉から聞いたぞ。まあ、お前には縁がないだろ。

「なつ、俺だつて頑張ればなあ……」

なら、頑張つてくれ。

まあ、モテルやつは頑張んなくともモテルだらうがな。

そんなことより、今、俺が確認したいのは

「転入生がうちのクラスつてのは本当か？なんでも3組じゃないんだ？」

「結構知つてんないな……。なんか『前の学校で4組だつたからどうしても4組がいい』ってその転入生が言つたらしいぞ」

「なんだそりゃ」

「知らねえよ。俺だつて聞いた話だから、事実かどうかも怪しいしな」

「ふうん。あつ、そろそろ時間だな」

「ん？ああ、もつそんな時間か」

俺たち担任は絶対に遅刻しない。

しかもスポーツ系の（確かラグビー）タイプの人間で怒らすと怖い。おひると怖いくせに、短気。なんて迷惑な。

ガラガラ

景気よく、扉が開く音がする。そして、それと同時に本鈴が鳴る。もしかしたら本鈴が鳴つてから扉が開いたのかもしれない。つまり同時つてことね。

「席着けえ。つて着いてるか。んじゃあH.R始めるわお」

みんな担任の、チャイムと同時に突入攻撃に慣れたようで、席に座つていいようひだつた。

「んじゃあ、みんな知つてると思つうが大事な連絡がある」

『来た!』みないな顔を生徒のほとんどがしている。栖那がムカつく顔をしていい。体育のサッカーの時間にスライディングしようつなんて思つてないぜ。ホントに。

「あー、みんな知つてるか…………。まあ、いいか。知つての通り転人生だ。入ってくれ」

『知つての通り転人生』つて適當だな……。

なんて思つていたら本鈴後、一度目の音が教室に響いた。

ガラガラ

その音の後に教室に入ってきたのは言つまでもなく転人生だ。そして黒板に自分の名前を書いた後、生徒側を向いて、皿口紹介。まあ、基本だね。

「今日からこの学校でお世話になる長谷部紅美です。よろしくお願ひ

いします

俺のこの落ち着き具合で分かってくれるだろ？
やはりとこ‘うか、当然といふか、あの女ではないようだ。
だが、俺は一つ気になる。そこまで美人には見えない。
いや、可愛くないって訳じやないんだが……。

なんて言つたか、生徒のほとんどが見に行くほどじやあないかと思える。

人違いつて訳じやあなさそうだ。周りの生徒の顔がそう言つている。
「あー、席はあそこの休みの生徒の席に座つてくれ。明日には席を用意しておく。それと、わからぬことがあつたら言つてくれ。まあ、うちの学校は何も特別のことはないけどな」

そう言つて担任は軽く笑つた。

普通最初に用意しておぐだろ。まあ、これが担任曰く、ラグビークオリティだな。

かなりいらないクオリティだ。

ちなみに、当然ながら転入生の席は俺の隣なんかじゃない。

俺の席の近くは間違ひなく満席だ。誰も入りようがないね。まあ、多少残念なのはこの際忘れよう。
てか、今うちの担任、学校にケチつけなかつたか？

「あー、それとだなあ……。あー、……お前ら聞け、成績落とすぞ」

担任岡部のこの一言で教室は静まり返る。後半のそのセリフは教師としてどうなんだ？

「実は転入生はもう一人いるんだが……。あー、確かトラブルで

遅れるそうだ。来たら紹介するから、そのことも頭に入れておくよ
うに」「たゞ

生徒がそういう驚いているようだ（当然俺も、な）。
それもそうか、美少女転入生（正直俺はそう思つてないが）が来た
と思つたら、まだいるなんて、これはたとえ孔子だろうと取り乱す
ぞ。

「あー、時間だ、HR終わりい。各自、次の授業の準備を怠らない
ように。以上、号令」

クラス委員の号令が言い終わつたところで転入生、長谷部紅美を多
数の生徒が取り囲んだ。

あ、誤解を生まないようになつておぐが、別に襲うわけじゃない。
お決まりの質問攻めだらう。

人数がやたらと多いと思つたら、他のクラスの連中までいやがるぜ。
ご苦労なこつた。

俺は……寝る。早く起きたせいでやたらと眠い。

そして、俺が夢の中に突入するには、そう時間がかかるなかつた。

第四話『転入生は・・・』(後書き)

さて、転入生です
そしてまさかの無関係

でも、もう一人いるみたいで

いや、でも正直完全に無関係だと進まないで

さて
それではこれからも『死神見習い中』をよろしくお願いします

第五話『悪夢の一人目』

俺は寝ていた。それは間違いないことだ。今は……3時限目の休み時間か。

結構寝たな。いや、それより俺が寝ている間に何があつたんだ？
それともまた夢なのか？

どうして……。

なぜあの女が俺の目の前にいるんだ！？

空が寝ている間の出来事

3時限目はLHRだった。

そしてLHRをしている途中に廊下から他の先生が来て、担任岡部を呼んだ。

数分して担任岡部は戻つて来た。もう一人の転入生を連れて。

「あー、朝に言つていた転入生の子だ。あー、じゃあ自己紹介してくれ」

「あー、朝に言つていた転入生の子だ。あー、じゃあ自己紹介をして、自己紹介を始めた。

「今日からこの学校でお世話になる神来弥来です。よろしくお願ひ

します

そつぱつて、また軽くお辞儀をした。

「あー、席は…………流石にそこまで休みはいないか。今後ろに机を持つていくからちょっと待つてくれ」

「あたし、席あそこがいいんですけど…………ダメですか？」

「あー、別にいいが…………。栖那！自分の席取りに行つてこい」

「なつ、えー！俺が自分で取りに行くんですか？先生が逝つて来てくださいよ」

「今、『行つて』のニュアンスが違かつた気がしたんだが…………」

「き、気のせいですよ。わかりました。取つてきますよ」

「よし、行つてこい。あー、隣の席の…………あの馬鹿はいつから寝てた」

「朝のHRの終わりからずっと寝てました」

「まあいい。なんかあつたら隣の馬鹿じやない方に聞いてくれ。以 上」

そつぱつたと同時に終了のチャイムが鳴る。

そして今

「ねえ、あんた起きなさいよ」

おもいつき机を蹴られた。何より俺は起きてくる。

「なつ返事へらへしなさいよ。それより、ちょっと来て

そう言い終わったか匕うかとこうとこうで、俺は引っ越し張られていっ

た。

ここは……。ああ、屋上か。
屋上は使用禁止だと思つたが。

「そんな人間が決めたルールなんて知らないわ。それよりあなたに
聞きたいことがあるの」

俺に聞きたいことねえ。悪いがスリーサイズには自信ないぜ。

「バカ、そんなことじやなくて。あんたにもわかるように簡単に言
うわ。『あの女』はなに?」

「は?」

思わずそう声が出ていた。きっとこれが条件反射つてやつだね。

「『あの女』って……どの女だよ」

「あんたバカ?『あの女』っていつたら『あの女』でしょ?」

こいつ馬鹿か?中学の時にこういう馬鹿がいたな。
自分が分かつたことは全員分かつていると思い込むやつ。そしてそ
れを前提にして話を進める。つまり自己中だ。

「悪いが俺にはお前が言う『あの女』の意味がわからん。てか、疑
問に思うなら本人に聞きに行つてこい」

「それができないからあんたに聞いてんでしょう?あつ、あんた今な
いんだった。忘れてた……。じゃあ伝わらないじゃない!」

俺の頭はここにきて正常に動き始めたのかもしない。
何でこの女がいるんだ?

あれは夢だったじゃないか。それにこの女、『人間が決めたルール』

とか言つてたな。

マジでこの女、死神なのか？

いや、そんなこじてや……。

とりあえず、聞かないとわからない、か。

「なんでお前がここにいるんだ？ あれは夢じゃなかつたのか？」

「あんた本当にバカじゃない？ あれは現実。わかる？ げ・ん・じ・

つ」

馬鹿にバカと言わると無性に腹が立つな。

いや、そんなことはいいんだ。（実際はよくないが）

あれは現実だと？

じゃあ何で日にちが戻っているんだ。

「あれはあたしがしたの。あんた死にそうだったし。いや～、あの時ナイフが刺さつてたなんて予想外よ」

ナイフが刺さつてた？

いや、それよりお前がしたって……何のためにだ。

「あんたの怪我を治すのがメンドウだったから。時間戻した方が楽だし」

時間を戻す？

時間を戻す！？

そんなことができるのか？

「できるからしたんでしょ？ 実際あんたも体験してるし」

じゃあナイフってどういうことだ？あの時刺さつてたのか？いや、俺は確認したはずだが……。

「ああ、あたしが言つてるナイフはあんたには見えないよ。『うん』

『うん』ってなんだ、『うん』って。

それより俺には見えないって何故だ？

大体痛みも感じなかつたぞ。

「簡単よ。力がないから。痛みが感じなかつたのは…………… そうなる『力』でも働いてたんぢゃない？ 気付かないように、とか」

その『力』ってのはなんだ？なんかの能力みたいなもんか？

「まあ、そうね。そんなことよりあの女…………… じゃなかつた。あたしともう一人、転入生がいたでしょ？ あれよ」

「あの転入生がどうしたんだ？」

確か名前は……………覚えてないな。
とにかく美少女らしいってのは覚えてる。

「うん、あんたに絡んできた…………… ヤンキーだつける？ まあ、その1人と同じ『もの』よ」

『もの』だと。人じやなくて、か？そりやあなんだ？

「そりや『もの』。まあ、正しくはその『もの』が憑いてる、かな」

第五話『悪夢の一人目』（後書き）

更新がすごく遅くなつてしましました
申し訳ないです

見てる人がいればですけど……

さて、そんなことより

今回は微妙な終わり方ですが気にしないで下さい
それでも、何とか話が続いて行きそうですね

それでもは

これからも『死神見習い中』をよろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0798f/>

死神見習い中

2010年10月14日17時57分発行